特別寄稿

母校と「不夜城」

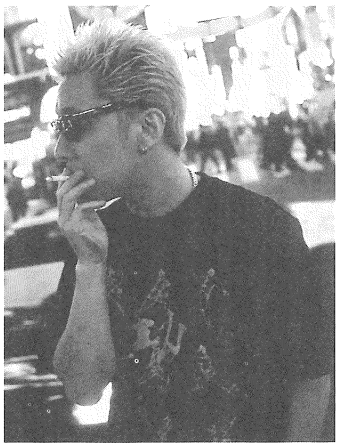
駛　星周

わたしはろくな学生ではなかった。望んで入学を果たしたというのに、そもそものはじめから、ほとんど学校に行くことはなかった。なにをしていたのか―新宿で飲んだくれていたのだ。

夕方から明け方まで、判で押したようにわたしは新宿に通いつめていた。日曜日と風邪を引いたとき、それに試験があったとき以外は、わたしは新宿に入り浸っていた。金沢八景から新宿まで、新宿から金沢八景まで。二年生になると自由が丘に越し、四年のときは東中野に越した。磁力に引きつけられるように、わたしは新宿に近づいていった。それと反比例するように、学校からはますます遠ざかっていった。たまにキャンパスに足を向けたとしても、授業を受けるより先に麻雀の面子を探すありさま―まったくもって、ろくな学生ではなかった。

そんなわたしを、四年で卒業させてくれたのだから、横浜市立大学はなんと大らかな校風を持っているということになる。学校へ行かず、新宿に入り浸っていたおかげで、わたしは『不夜城』を上梓することができたわけだから、我が母校の大らかさには感謝するしかない。

今でこそ、学生のときにもっと勉強しておくべきだったと忸怩たる思いにとらわれることがある。しかし、実際に学生だったときは別だ。フランス語の文法、ロラン・バルトのわかりにくい論文―そんなものよりも、夜の盛り場で見聞きするすべてのことが新鮮で魅惑的で面白かった。わたしはそこで人生のなんたるかを学んだ―とりわけ、世界の、人間の暗い面を学んだ。学校では決して教えてもらえないことを、わたしは貪欲に吸収していったのだ。



卒業し、就職し、フリーになり―わたしの周りにはなにも残らなくなっていった。当然だ。わたしには社会が要求する常識的なものをなにも持っていなかった。専門知識があるわけでもなく、不道徳なモラルに身を染め、夜ごと新宿で飲んだくれている男―先は見えていた。真っ暗な穴がわたしを飲み込もうとしているのがよくわかった。

なんとかしなければ―わたしにできるのは書くことだけだった。わたしがなによりも知っているのは新宿のことだった。だから、わたしは『不夜城』を書きはじめた。

この秋、わたしは母校で後輩を前に講演などというものをやらなければいけないはめになった。引き受けたことを少しばかり後悔している。こんなわたしが、なにを語ればいいというのだろう？母校に対する思い入れは無きに等しい。わたしは世界に絶望しかかっているので、希望に溢れた言葉など口から出てくるはずもない。それでもなんとかなるだろう―つまるところ、わたしが新宿で学んだのはそういうことなのだ。

校歌CD作成さる

この度　横浜市立大学校歌のCDが卒業生らの手で完成した。1955年西條八十作詩　古関裕而作曲で制作された校歌はメンネルコールOB松本肇が男声四部合唱に編曲し、早速同年7月、県立音楽堂で行われたメンネルコール第2回定期演奏会の開幕に演奏され、その後機会あるごとに歌い継がれて来た。

平成9年松崎俊行（昭33年卒、㈱インテルメッツオ）が前学長の賛同を得てCD化を企画・制作の運びとなった。

平成9年1月18日藤沢市民会館大ホールにメンネルコールOB、現役混声合唱団、管弦楽団が一堂に会し録音が行われた。メンネルコールOBは40数名が参集、数十年ぶりのステージに感慨も新たに熱唱し無事録音を終った。CDは混声合唱の斉唱、管弦楽団の演奏、メンネルコールOBの男声合唱の三本立で他に横浜市歌も収録されている。

卒業生諸兄姉、是非このCDを試聴されよ。メンネルコールの昔に変らぬ？若々しい歌声を聞く時、潮風かおる園に過した青春の日々が鮮やかに蘇るであろう。

なおCDは送料、封筒他込みで1、100円、住所、氏名、電話番号を記入し代金を同封し現金書留で〒236―0027　横浜市金沢区瀬戸22―2　横浜市大生協本校店購買書籍部CD係へ申し込まれたい。

（昭31卒　小田修次記）

第五回　市大同窓会の開催

第五回　市大同窓会が平成九年十一月七日（金）に市大キャンパスに新たに建設されたシーガルセンターで開催された。この日大学では大学祭が行われていて大変賑やかであった。

五百人を超える同窓生が参加、会場のシーガルセンターは身動きも出来ない状況であった。

会は馬場会長の挨拶に始まり、高秀市長も出席され大変な盛りあがりとなった。卒業してから初めて大学を訪れた人からは大学の建物など昔のおもかげを残さない程の変わり様におどろいていた。

次回は平成十一年の開催となりますのでご期待下さい。

「新・横浜料理はじまる。」
世界の食文化が集う
横浜の美味のメインステージ
横浜駅東口
崎陽軒 本店
KIYOKEN YOKOHAMA
お問い合せ 441-8811　ご予約 441-8880